

## 看護職及び看護学生の英語コミュニケーション能力育成に関する 研修プログラムの開発 — 国内研修プログラム —

中村博生, 山本淳子  
新潟県立看護大学

キーワード：英語コミュニケーション能力, 音声変化,  
ストラテジック・コンピテンス, 介入援助

### 目的

本研究の目的は、看護職及び看護学生のための英語コミュニケーション能力育成プログラムを開発することである。その目的のために、コミュニケーション能力（グラマティカル・コンピテンス（文法能力）とソシオリングイスティック・コンピテンス（社会言語学的能力）そしてストラテジック・コンピテンス（戦略的能力）の3能力から構成される能力[Canale, M. & Swain, M. (1980)]の中のストラテジック・コンピテンス（何らかの理由で、コミュニケーションがうまくいかない時に発揮される、コミュニケーションを進めるための、会話の当事者が行う工夫）に焦点をあて、学習内容や指導方法を精選しプログラムを開発する。開発するプログラムの基本となるものは、当看護研究交流センターの生涯学習・研修支援部会主催の看護英会話セミナーの5年間継続されたプログラムである。

### 研究方法

#### 1. コミュニケーション能力育成のための指導方略と内容

- 1) 英語コミュニケーション能力に関する指導：文法, 語彙, 英語の音声 [音声変化 (Nakamura, H. 2000)]
- 2) 個別学習の実践：恒常的な英語学習のための動機づけ（個人での文法学習, 語彙学習, リスニング学習の方法）
- 3) 会話演習：ネイティブ・スピーカーとの会話演習は日常会話と専門に関する内容のディスカッションを行い, その活動において介入援助を行いながら, ストラテジック・コンピテンスの習得と使用を意識づける。

#### 2. 研修プログラム開発のための実験的実践

- 1) 被験者 看護研究者4名
- 2) 学習内容  
(1) 英語の音声変化とその聞き方（ビデオ教材を中心に）(2) ストラテジック・コンピテンスをふまえた英語コミュニケーション能力育成のための英語表現の学習 (3) 日常英会話におけるコミュニケーション能力育成を目的としたストラテジック・コンピテンスの基礎的な学習 (4) 看護の専門の内容をベースとしたディスカッションを通したストラテジック・コンピテンスの応用

#### 3. 学習過程

学習内容の(1)と(2)は1.5時間ずつ2回行い, (3)と(4)は1回に45分ずつ行い全部で7回実施した。延べ25名の参加者のうち調査対象となる5回以上の参加者は4名であった。

#### 4. 講師及び評価者： ネイティブ・スピーカー1名, 日本人英語教師1名

#### 5. 調査： 質問紙による自由記述 (①研修で得たもの ②プログラムについての評価 ③指導方略と内容に関する評価)

### 結果

本研究のプログラム参加者への質問紙による調査から次のような回答が自由記述であった。( )内は同様の回答をした被験者の人数を示す。

1. 研修で得たものは何か：英語学習の意識づけができた(3)。外国人に対する恐怖心の払拭ができた。発話時の自己の語彙や文法のエラーを許容できるようになった。英語学習を日常の生活へ埋め込むノウハウを習得できた(2)。外国の文化に興味をもち日本の文化を再認識できた(2)。自分の伝

えたい表現方法、単語をその場で知ることができた（ストラテジック・コンピテンス）。使用する語彙をフレーズ単位で意識できるようになった（ストラテジック・コンピテンス）。

2. プログラムについての感想：段階的に英語に慣れていくことができた(2)。看護に関するディスカッションは興味深かった。聞き取りを助けるための補助教材、教具が必要であると感じた(2)。発話の機会を与えられることで主体的な取り組みが生まれた。看護の専門分野のディスカッションでは、難しい単語をやさしい単語に置き換えて話す力が必要であると感じた（ストラテジック・コンピテンス）。日常会話で英語に慣れてから専門のトピックに移るのは効果的だ。興味ある内容(看護や看護教育)に関するディスカッションは意欲が湧く。
3. 介入援助（指導者(日本人英語教師)がネイティブ・スピーカーとの会話演習の中に加わり、受講者にリスニングとスピーキングの援助を行う試み）：介入援助は効果的であった(4)。指導者の介入は不安解消に効果があり話す内容を取捨選択する余裕が生まれた(2)。

## 考察

英語でコミュニケーションを行う際に、英語の音声聞き取れなければいけない。語彙や文法の知識もさることながら、英語独特の音声に慣れることが要求される。さらには、外国人に対する恐怖心や外国文化の知識の量など（背景的知識）にも左右され、未知の内容を聞き取るときは音と背景的知識の両方から聞き取るよう努力しなければならない。今回のプログラムでは、こうした英語コミュニケーション能力育成に欠かすことのできない基本的な要因を学習者自身が自覚した。発話時では、英語の表現も意識的な単語の置き換えやパラフレーズができるようになることが見て取れた。「何とかコミュニケーションはとれるのだ」「使用する言葉の単位が単語からフレーズへと移行した」などの記述から、自らのコミュニケーション能力を無意識のうちにストラテジック・コンピテンスの観点から再検討でき、さらには語彙や文法のエラーを容認できるようになったことは、流暢さへのステップアップをストラテジック・コンピテンスの応用とともに意識できたのではないかと解釈できる。学習過程の観点からは、日常会話の次に専門分野に関するディスカッションという構成は、より高度でアカデミックな内容を英語で話すためのレディネスを高めるために有効であったと思われる。さらに介入の有効性については、指導者が会話に加わることで、学習者の不安感が薄れ話しやすい雰囲気が増したのは、介入者が学習者にとってリスニング、スピーキングの補強となり、安心感が生まれるからだと推測される。

## 結論

英語コミュニケーション能力育成のための基礎知識（語彙、文法、音声変化）の学習は、個別の学習でも必要不可欠である。また、ネイティブ・スピーカーとの会話演習で、ストラテジック・コンピテンスを習得する指導過程を意図的に設定することが好ましいとの指摘があった。その際、指導者の介入援助が学習者の心理的な安心感をもたらし、学習に集中できるという効果をもたらす事が認識された。プログラムの構成では、平易な日常会話の演習から専門の内容に関するディスカッションへと移行するステップを組むことが、学習者にとって情意フィルターを低くするうえで効果的であると推測された。教材は、専門に関する内容が学習者の意欲を高めるとされる。以上のことに基づき、本研究の国内研修プログラムは開発されることとなる。

## 文献

- Canale, M & Swain, M. (1980): Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing, *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Nakamura, H.(2000): The Effect of Two Different Kinds of Repetition Drills on Japanese EFL Learners' Listening Ability: The Careful Colloquial Style and the Rapid Colloquial Style with Sound Changes, *大学英語教育学会紀要*, 31, 65-78.